

# 谷崎潤一郎作品における白人女性

大 黒 華

## 序

谷崎潤一郎の作品には西洋に強い憧れを持つ男主人公が度々登場する。また、谷崎自身も「正直を云ふと、二十歳時代三十時代、いや、四十歳を越す頃まで、私の第一の夢は「洋行」であつた。」（「雪後庵夜話」昭和三十八年六月）九月『中央公論』と述べているように、文壇に登場した明治末期から昭和初期まで西洋に惹かれ続けており、特に大正期には西洋崇拜熱が絶頂に達していた。その中でも白人女性に対する憧憬は強く、作中においても主人公に白人女性を賛美する言葉を多く語らせている。

しかし、先行研究の多くは白人女性を谷崎自身や谷崎作品における西洋崇拜の一部分としてしか扱っておらず、谷崎作品全体の白人女性の描写や意味について詳細な検討を加えたものはほとんどない。また、白人女性を中心に論じているものでも、混血女性や西洋人的な日本人女性も含

めて白人女性として考察しており、問題があると思われる。そのため、本論では、混血女性や西洋人的な日本人女性と白人女性とを主に谷崎作品における記述や描写から区別する。その上で、混血女性や西洋人的な日本人女性の描写とも比較しながら、谷崎作品における白人女性の意味について考察する。

まず第一章では、谷崎作品における西洋崇拜について簡単に確認したうえで、本論における白人女性の定義を対象とする女性の描写から定める。そして、先行研究の内容を確認するとともに、その問題点を指摘する。第二章では、白人女性や混血女性が登場する十作品について男性主人公との関係性を確認する。第三章では、第二章の内容を踏まえて、同時代の人々の白人に対する認識と谷崎作品に表れる白人女性の描写とにおける共通点と相違点を挙げる。第四章では、谷崎作品において白人女性が特別な存在として描かれる要因のひとつとして、「母」との関連性が考えら

れることを示す。さらに、昭和初期以降、谷崎は日本の古典的世界を題材にした作品を執筆する、いわゆる古典回帰の傾向を強くするのであるが、その昭和初期の古典回帰の時期の前後で、白人女性と「母」のそれぞれの立ち位置がどのように変化しているのかについての考察を行う。結論では、谷崎作品において白人女性是他の種類のカテゴリーの人物と比べ、明らかに特別な存在として描かれていること、そしてそれは白人女性の背後に「母」を見るところ、崎独自の感覚が影響しているためであるということを示す。

## 第一章

まず、谷崎の西洋崇拜について作中の記述や先行研究から簡単に確認する。多くの谷崎作品に西洋への憧れが描かれているが、「饒太郎」（大正三年九月『中央公論』）における次の記述はその中でも比較的最早い時期のものである。

——あゝ己は西洋へ行きたいな。あんな荘厳な、堂々とした婦人の肉体を見る事の出来ない国に生れたのは己の不幸だ。芸術が何だ、文学がなんだ。こんなちぼけな体格と、ぼんやりした色彩と、浅薄な刺戟しかない日本に居ながら、立派な芸術なんかできる

もんか。——

ここでは、放蕩の限りを尽くして借金まみれになり、極限状態に陥った主人公の饒太郎が現実逃避をして、西洋人女性や「巴里」に思いを馳せる様子が描かれている。「金色の死」（大正三年十二月『東京朝日新聞』）においても、主人公の岡村君が西洋への憧れを次のように語っている。

「あゝ西洋へ行きたい。立派な体格を持った西洋人に生まれなかつたのは僕の第一の不幸だ。」其の時分、彼の西洋崇拜熱は非常に旺盛になつて、一しきり「日本の物は何でも嫌ひだ。」などと云ひました。

ここでは西洋への憧れを語ると同時に、日本的なものに対する嫌悪感も示していることが確認できる。次に、谷崎作品における西洋崇拜や西洋観といった点で論じられることの多い「痴人の愛」（大正十三年三月〜六月『大阪朝日新聞』、大正十三年十一月『女性』）では主人公の譲治が自身の西洋への憧れを次のように語っている。

私が、自分は野暮な人間であるにも拘はらず、趣味としてハイカラを好み、万事につけて西洋流を真似したことは、既に読者も御承知の筈です。若しも私

に十分な金があつて、氣随氣儘な事が出来たら、私は或は西洋に行つて生活をし、西洋の女を妻にしたかも知れませんが、それは境遇が許さなかつたので、日本人のうちでは兎に角西洋人くさいナオミを妻としたやうな譯です。

谷崎作品における西洋崇拜について、例として三作品挙げたが、これらに共通していることは、主人公が西洋（それは西洋の芸術であつたり、西洋人女性であつたり、西洋風の生活であつたり、様々な形で表される）に非常に強い憧れを持ち、洋行を望んでいるが、諸事情から実現することができない状況に在るということである。言い換えると、この主人公達は洋行し、西洋そのものに触れるという経験はないが、日本において関わることできる程度の西洋に触れ、憧れの気持ちを募らせているということである。このことは、作者である谷崎の西洋崇拜とも密接に繋がっているとされており、谷崎自身も後に「正宗白鳥氏の批判を読んで」（昭和七年七月『改造』）において次のように振り返っている。

ひところは私も多くの青年と同じく西洋に心酔した時代もあつたが、その時分に書いた作品を今から読み返してみると、ほんたうに日本離れしたものは一つもな

い。（略）勿論、西洋の影響を受けたことを有害無益と考へるわけではないが、余人は知らず、自分の青年期の作品に関する限り、その影響の現はれ方が甚だうすつぺらで、軽率であつたのが氣恥ずかしくてならぬい。

また、中村光夫氏は「谷崎の西洋に対する心酔は、彼自身の云ふやうにその半生を貫いた激しい熱情であり、彼の芸術観そのものとも密接な関係を持つてゐますが、おそらく彼の抱いたすべての熱情と同様に、熱烈なわりに表面的であり、その知的な内容はなほだ淺薄といふほかない」と、谷崎自身や谷崎作品における西洋理解が淺薄であり、その西洋崇拜も感覺的なものだと言っている。中村をはじめとして多くの先行研究が谷崎作品における西洋崇拜について感覺的、皮相的と論じており、岩田恵子氏は『痴人の愛』（大13）のナオミに代表される西洋は、まさに精神の成長のない、肉体だけ活かされた、物質文明だけ移入していた日本の姿に他ならなかつた。」と述べている。これらの先行研究の中には、西洋人女性について触れられているものもあるが、その多くは日本人であるナオミを中心に論じたものである。四また、西洋人女性と言っても、白人であるのか、混血児であるのか、その定義が曖昧なものもいくつか見られる。本論では、谷崎が西洋崇拜の絶頂期

に理想の女性として渴望していたと考えられる白人女性についてその他の人種カテゴリーに属する女性との比較対照を通して考察をしたいと考えている。そのためにもまずは、谷崎作品における白人の定義を定める。

谷崎が西洋崇拜の一柱として白人女性を位置付けていたということは、『痴人の愛』のナオミとシユレムスカヤ夫人を比較する場面や「戀愛及び色情」(昭和六年四月一六月『婦人公論』)で「眞に男子をその前に跪かせるやうな崇高な美の感じ」のする存在として西洋人女性を挙げ、絶賛していることから読み取れる。しかし、実際に谷崎作品において「白人」と表記されている人物は少なく、その殆どがただ「西洋人」とされているのみである。<sup>五</sup>そのため、まずは、学術的な白人の定義について先行研究から簡単に確認していく。

藤川隆男氏は『白人とは何か? ホワイトネス・スタディーズ入門』<sup>六</sup>において「一般的に、人種は人類を身体的特徴で分類したものであり、民族は文化的な特徴で分類したものと言われている。この考え方によると、白人とは人種分類であり、ある程度の客観的根拠で分類できる集団ということになる。おそらく、あるDNAをもつ集団を白人とすれば、客観性は増すように見えよう。しかし、このように分類された白人と、特定の時代の、特定の地域で人々が白人だと認識する人間の集団はおそらく異なってい

るだろう。(略)名譽白人の例を出すまでもなく、白人とは身体的特徴によつて決まるものではなく、地域や時代によつて大きく変化するのである。」<sup>七</sup>と述べており、白人の定義は流動的であることが示されている。そうであるのならば、近代日本では一般的にどう定義されていたのだろうか。それについて杉本淑彦氏<sup>八</sup>は、明治以降の日本ではキユヴィエ<sup>九</sup>の人種三分類法、すなわち「白色・黄色・黒色人種」という人種の捉え方が定着したと指摘している。また福沢諭吉は白人について「皮膚麗しく毛髪細にして長く頂骨大にして前額高く容貌骨格都て美なり其精心は聡明にして文明の極度に達す可きの性ありこれを人種の最とす歐羅巴一洲、亜細亜の西方亞非利加之北方、及び亞米利加に住居する白哲人は此種類の人なり」<sup>十</sup>と説明している。これらの情報を総合すると、近代日本では、一般的にはキユヴィエの三分類法が浸透しており、白人の定義や認識もそれ倣う形であったと考えられる。しかし、白人の学術的な定義にはやはり曖昧さが残る。そのため、谷崎作品の登場人物のうち、誰を白人女性と規定するのかということ、学術的な定義に基づいて厳密に指摘することは難しい。しかし、そうであったとしても、谷崎作品の混血女性や西洋的な日本人女性までを白人女性と一括して理解することもまた問題であるだろう。前述の通り、当時は、「白色・黄色・黒色人種」という人種の捉え方が一般に定着しており、

異なる人種のそれぞれの特性を持っているはずの混血女性や、黄色人種とされる日本人女性を、白色人種と捉える見方は当時の感覚と明らかにズレている。後述する通り、谷崎もまた、作品に登場する、混血女性や日本人女性と、白人女性とを異なる存在として、描き分けている。そこで、本稿では、谷崎作品における白人女性を、混血女性や西洋的な日本人女性と区別しつつ、そのことを前提とした上で、肌の白さが描写として強調されている異国の女性、あるいは、それに類する存在と、緩やかに定義する。この定義に基づいて、以下では考察することにする。

ここからは作品における白人女性の考察に戻る。谷崎の西洋崇拜について論じた先行研究についてはいくつか説明をしたが、その中でも特に白人女性に焦点をあて論じているのが、細江光氏の『「痴人の愛」論——その白人女性の意味を中心に——』である。細江氏は、まず、谷崎作品における白人女性は男性主人公にとって「憧れの対象であると同時に死や恐怖や破滅を齎す存在」だと指摘する。そしてその理由について、「女の顔」（大正十一年一月『婦人公論』）、「アヱ・マリア」（大正十二年一月『中央公論』）、「痴人の愛」の考察を通して、谷崎の描く理想の女性は空想の中の母であり、この母に現実の存在の中で最も近いのが白人女性だと指摘する。そして、「谷崎はこれらの女性に対して母に応じた憧れと、同時にインセスト・タブーか

ら来る恐怖を感じて」いたので、作中の白人女性は、男性主人公にとって憧れの存在であると同時に「死や恐怖や破滅を齎す存在」として描かれたと述べる。白人女性と母との関連性については、四章で詳しく検討を加える。

この論の疑問点として、細江氏は白人女性について「死や恐怖や破滅を齎す存在」と指摘しているが、その際に例として挙げられた人物の中には、西洋人らしく振る舞う日本人や混血児が含まれているという点が挙げられる。<sup>112</sup> また、それに伴って白人女性や混血児、日本人を一纏めにして「死や恐怖や破滅を齎す存在」と大きく捉えているが、そこに人種による差異はないのかという点が疑問である。次に、細江氏が詳細な検討を加えているのは「アヱ・マリア」と「痴人の愛」の二作品のみだが、谷崎作品における白人女性の意味を考えるためには、全ての作品から白人女性の描写を拾っていく必要があるだろう。<sup>113</sup> 次章では、白人女性や混血女性が登場する十作品について、男性主人公との関わり方という面からその描写を確認していく。

## 第二章

ここでは、改めて谷崎作品における白人女性や混血女性の描写について、人種を区別したうえで確認していき、男性主人公との関係性ごとに分類する。そして、それらを比

較対照することで、白人女性の描写の意味や特徴について考えていきたい。

ここで取り扱う作品は、「獨探」（大正四年十一月『小説』）、「人魚の嘆き」（大正六年一月『中央公論』）、「本牧夜話」（大正十一年七月『改造』）、「白狐の湯」（大正十二年一月『新潮』）、「アヱ・マリア」、「肉塊」（大正十二年一月—四月『東京朝日新聞』）、「痴人の愛」、「友田と松永の話」、「一房の髪」（大正十五年二月『婦女界』）、「夢喰ふ虫」（昭和三年十二月—四年六月『大阪毎日新聞』）、「東京日日新聞」の十作品とする。描写を確認していく中で特に注目するのは、男性主人公との関係性である。その関係性とは、簡単に説明すると男性主人公と良好な関係を築くことが出来るか否か、ということである。<sup>14</sup> この観点から、①良好な関係を築くことができない、②良好な関係を築くことができる、③例外と三つに分類して示す。

まず、①の良好な関係を築くことができないパターンについて確認していく。先に結論を述べておくと、対象が日本人男性（黄色人種）と白人女性の場合はここに当てはまると考えられる。では、作品ごとに見ていく。「人魚の嘆き」の主人公は財も美も兼ね備えた支那人の貴公子である孟世燾で、女性側は「オランダ人の凡ての理想と端麗を具体化したような容姿」を持つ人魚である。勿論、人魚となると人種どころか人外の存在ではあるのだが、作中では明

らかに白人として描写されている。人魚の瞳は「ガラス張りの器に盛られた清冽な水を透して、恰も燐のやうに青く大きく輝いて」おり、皮膚の色は「一点の濁りもな」いほどに眞白で、「白いと云うより『照り輝く』と云つた方が適当なくらゐ」とされておられ、更にはその美しさは人間よりも神に近いとまで言われている。このように白人らしさを強調して描かれた人魚に孟世燾は夢中になるが、人間は人魚に触れると死んでしまうため結ばれることなく、人魚を西洋の海に帰したところで話が終わる。

次に、人魚と同じく白人として描かれた人外の存在が登場する。「白狐の湯」を見ていく。「白狐の湯」は戯曲形式で、主人公の角太郎が白人女性であるローザに化けた狐に騙されて殺されるという筋の話である。ローザ（狐）は「眞つ白な体」で髪は金髪とされており、巴里出身と述べている。また、物語の最後に登場する本物のローザは谷崎作品では珍しく「白人」と明記されている。角太郎はローザ（狐）をローザ本人と信じて慕い続け、共にパリへ行くことを約束する。しかし、次の日に角太郎は死体で発見される。

この二つの話では、異国の存在である白人を人外の魔性の存在と重ねて描いている。そして、両者ともに異常なまでに美しく、男は完全に魅了されているが、人魚は人間に触れると凍死させる力を持っており、ローザ（狐）は角

太郎を西洋に連れていくと言つて誘惑し、殺したということが作中で暗示されている。ここから、日本人男性が白人女性と深い関係になろうとすると死がもたらされること分かる。<sup>十五</sup>

次に、「アヱ・マリア」を見ていく。この作品の主人公はエモリという日本人男性で、ここで取りあげる白人女性にはニーナというロシア人女性である。ニーナはミセス・Wというロシア人女性と日本に住んでおり、エモリがその家で間借りをさせてもらっている。エモリはニーナのことが好きで憧れているが、それと同時にニーナと自分では釣り合わないと言っている気持ちもある。そのため、ニーナのために金を用立てたり（妄想の中での話）、靴磨きなどの雑用を自ら進んで行ったりする。しかし、最終的にはニーナが元々交際していたロシア人将校とミセス・Wと共に上海へ行くこととなり別れる。

「痴人の愛」では主人公である譲治とダンス教室の先生であるシュレムスカヤ夫人（ロシア人）について確認する。二人はダンス教室の先生と生徒という関係でそれ以上は何もない。ただ、譲治はシュレムスカヤ夫人の胸に抱かれてダンスの稽古することに言い知れぬ魅惑を感じていると同時に、自分のような冴えない日本人が夫人のような白人女性と関わることに恐れを感じている。実際には、夫人は既に子供が二人いる未亡人であり、譲治のこともダンス教

室の生徒としか思つておらず、譲治自身もナオミと結婚しているの、正式な関係をもつ対象としては互いに意識していない。

この二つの作品からは、ごく普通の純粋な白人女性と日本人の男主人公は関係を持つことができないということが分かる。また、男性主人公は白人女性に強い憧れを持つと同時に、日本人である自分が憧れの存在である白人女性と関わりを持つというところに強い恐れを抱いている。この点でも両作品の描写は共通している。

最後は、「獨探」である。主人公がバアを訪れた時にその店の商売女であるロシア人女性に媚を売られ関わりを持つ。（肉体関係を持ったかどうかは明記されていない）しかし、ロシア人女性が主人公に近づいたのは明らかに商売のためであり、だからこそ、他の客や店の女の目がない二人きりの状況では、主人公は非常に冷淡に扱われる。一方、主人公の知人である西洋人男性Gへの対応は非常に良く、日本人である主人公に対する態度と対照的である。「獨探」では、男性主人公と白人女性が関わる事ができているが、良好な関係とは言い難く、あくまで商売女と客の一夜限りの関係として描かれていると考えられる。

ここまで、①良好な関係を築くことができない、に当てはまる五作品について確認してきたが、共通しているのは、女性側が全員白人であり、男性側は全員日本人（或は

黄色人種」ということである。よ、つまり、日本人男性と白人女性は良好な関係を持つことができないうことである。それをより明確にするために次に②良好な関係を築くことができている、に当てはまる作品を確認していく。

②に当てはまる作品のうち最初に確認するのは「肉塊」と「蓼喰ふ虫」である。「肉塊」では、日本人である吉之助と混血児のランドレンが男女の関係を持っている。ランドレンの出自は作中では明らかにされていないが、その容姿はポルトガル人と支那人の混血のようだと言われており、吉之助の妻である民子はランドレンを初めて見た時に「自分をかけ離れた優雅な人種的美貌」と感じている。また、吉之助はランドレンを「怪しい魑魅」と形容しており、ランドレンは谷崎作品における典型的な妖婦型の女性として描かれていると考えられる。そして、吉之助は妻子のある身でありながらも、ランドレンの誘惑に打ち勝つことができず、男女の関係を持つこととなる。その後、ランドレンに言われるがままとなり、墮落していく。そして職も家族も友も失うこととなる。主人公は混血児であるランドレンと関係を持つことができたが、そのため多くのものを犠牲にしているということである。

「蓼喰ふ虫」では、主人公である要がルイズというロシアと朝鮮の混血女性と関係を持っている。要は美佐子という妻と息子を持つが、夫婦関係は破綻しており、美佐子に

は阿曾という恋人がいる。そして、ルイズは要と長い付き合いのある商売女として登場する。ルイズの特徴としては、「濁りを含んだ浅黒い皮膚」が挙げられる。その肌の色については母方にトルコ人の血が混ざっているためと説明されており、ルイズ自身は肌の色が白でないことを気にしている。だからこそ、それを隠すために全身にお白粉をして、より純粋な白人のように見せようとしている。だが、理由はそれだけでなく、ルイズは日本人男性の白人女性への憧れを十分に理解しているため、わざとお白粉をして、白い肌を演出しているとされている。要も浅黒い元の肌の色にも魅力は感じるとは言いつつも、「たとひ人工的であつても矢張白皙の肉体が醸す幻想を破りたくない」が故に一度もお白粉を除けさせたことがないと語っている。ルイズと要は、商売女と客という関係ではあるが、二、三年の付き合いであり、「獨探」のような一回きりの金銭のみの関係だとは言えない。しかし、互いに情が芽生えていたとしても、要がルイズと関係を持ち続けることができているのも要が客だからである。そういう意味では、要の場合は金を支払い続けることで、混血児であるルイズと関係を持つことができたと言えるだろう。「肉塊」と「蓼喰ふ虫」で共通していることは、日本人男性と混血女性ならば良好な関係を築くことができるということである。しかし、例え混血女性だとしても関係を持つためには、それなりの代償が



必要であり、吉之助は家族と職と友を失い、要は金銭を払い続けなければならない。

次に「本牧夜話」と「一房の髪」を確認していく。「本牧夜話」では、日本と米国の混血児であるセシルとロシア系猶太人のジャネットの関係を見ていく。セシルは日本人の初子を妻としながらもジャネットと愛人関係を持つている。そして、初子をつまらない日本人として無下に扱っている様子が描かれている。セシルとジャネットは愛人関係ではあるが、初子が妻としては空気のような扱いを受けているため、比較的オープンな付き合いを続けている。しかし、事故に遭いセシルが顔に大火傷を負ったことにより、ジャネットはセシルに冷淡になり、遊び仲間のフレデリック（米国と日本の混血児）に乗り換える。そして、それを病んだセシルがジャネットを殺し、その後すぐにジャネットを追って自殺したところで物語は終わる。この話では、男主人公側が純粋な日本人ではなく混血児であるために、白人女性であるジャネットと関係を持つことができたと考えられる。しかし、顔に大火傷を負ってからは、無下にされ元の関係には戻ることができない。しかも、その事故を因らざるも後押ししてしまったのが、作中唯一の純粋な日本人である初子なので、日本人による働きかけにより、セシルが白人女性と関係を持ち持続する権利を失ったというふうに考えることもできる。しかし、半分とはいえ日本人の

血が入ったセシルには、白人女性であるジャネットと完全に結ばれる権利はなかっただろうし、初子の働きかけがなくとも、いずれジャネットとの関係は終わっていただろう。その証拠に、ジャネットがセシルを金づるとしか見ていなかったということが作中で暗示されている。つまり、それはセシルに金づるとしての価値がなくなったら、火傷をしていようがいまいが、ジャネットがつき合い続ける意味はないということの意味している。

次は、「一房の髪」を確認する。この作品は、ディックが私に過去の話を語るという形式をとっている。男性側としては日本と米国の混血児であるディック、ジャック、ポップの三人が登場し、女性側としてはロシア人のオルロフ夫人が登場する。オルロフ夫人は亡命ロシア人であり、横浜のアメリカー人やイギリス人からは疎まれ敬遠されていた。同じように、西洋人からも日本人からも無下な扱いを受けてきた混血児達は自然とオルロフ夫人を崇拜するようになり、その中でも特に熱心だったのが、ディック達三人である。オルロフ夫人は三人それぞれと関係を持つており、全員に気を持たせる言動をしたうえで、様々なものを貢がせて贅沢な暮らしをしていた。このように夫人と三人の関係は危うい均衡のうえで成り立っていたのだが、ある日地震が起こることで、全ての関係が終わる。ポップは地震によって亡くなり、地震直後の混乱している中で本性をあら

わした夫人はジャックに殺され、ジャックも後を追って自殺した。そして、最終的にデックだけが生き残ることとなる。「一房の髪」においても、男性側が混血児であるからこそ、白人女性と関係を持つことができたと考えられる。しかし、地震がきっかけとなり全ての関係は解消された。

「本牧夜話」と「二房の髪」の共通点は、男性主人公側が混血児であれば、日本人の血がはいっていても、白人女性と関係を持つことができるという点である。しかし、両作品ともに関係を持つことができたとは言っても、相思相愛というよりは男性側が白人女性に夢中になっている状態であり、女性側は主に経済的な面で男性主人公を利用していただけである。だからこそ、ジャネットはすぐに他の男に乗り換えてセシルに冷淡になり、オルロフ夫人は自分に尽くすためだけの存在として男三人を良いように扱う。このように、男側が混血児であれば、白人女性と関係をもつことはできるが、対等の関係でなく、男の方が低い位置に置かれている。そのため、継続的な関係を築くことは困難となり、なにかトラブルがあれば男側が簡単に切り捨てられるのである。

②に当てはまる四作品を確認した結果、②のように、どちらかが混血児（白人女性側が純血ではない、もしくは男性主人公が日本人と西洋人の混血児である場合）であれば、関係をもつことができるということが分かった。しか

し、この四作品の中で何も代償を払わずに、関係を持つことができた男性はおらず、また永遠に代償を払い続けることができないと思えないので、関係を継続するのも困難だろう。その点では、どちらかが混血児であるからこそ関係を持つことはできたが、その一方で、混血ではあっても日本人とは白人の間には、やはり超えることのできない壁があるとと言えるだろう。次は、③例外の当てはまる作品について見ていく。

③例外に当てはまる作品は、「アズ・マリア」と「友田と松永の話」の二作品である。まずは、「アズ・マリア」を確認していく。この作品では既に①のところでもエモリとニーナの関係をみてきたが、ここで見ていくのはエモリとソフィアという白人女性の関係についてである。エモリがニーナ達と別れた後に出会ったのがソフィアである。ソフィアの人種については、作中では明言されていないが、真っ白な肌や金髪、そして碧色の瞳を持っているとされているので、おそらく白人として描かれていると考えられる。ソフィアが家族と住んでいるアパートは貧しい外国人が多く住んでおり、ソフィア達も裕福ではない。そのため、ソフィアは痩せてやつれている上に片足が不具である。その詳細は明記されていないが、おそらくエモリはソフィアの弟であるワシリーを通してソフィアと知り合って親交を深めたと考えられる。ソフィアは前述の通り、貧しく身なり

もみずばらしいがエモリにとつては美しく崇めるべき存在である。何故かという、エモリはソフィアの中に聖母マリアの影を見ることができ、「不具ではあるが、私に取つては完全な姿だ。」とまで言わしめている。そして、エモリとソフィアは特に問題もなく良好な関係を築くことができていく。(肉體關係にまで發展しているのかは作中では明記されていない) 言い換えると、日本人男性であるエモリと(おそらく)白人女性であるソフィアが關係を持つていくということになり、そうであるのならばこれまで見てきた「谷崎作品では、日本人男性と白人女性は關係を持つことができない」という論から外れた例外的な作品ということになる。

例外的な作品であることには間違いないのだが、ソフィアの描写に注目したうえで、何故この作品では白人女性と關係をもつことができたのかという点について考えたい。まず前提として、ソフィアは人種がはっきりしていない。ただし、肌や髪の色は典型的な白人に近いので、おそらく白人女性として描かれていると考えられるのだが、貧しさのせいでソフィアの持つ外見の白人性が薄れていると考えられる記述が見られる。例えば、エモリはソフィアの容姿について「うすいそばかすのある顔、金色ではあるが病み上がりのやうに少い髪、発育のおそい子供のやうな小柄な体つき、瘦せた両肩、不具な片脚(下略)」と説

明しており、白人女性の魅力としてよく谷崎作品でも挙げられるふくよかな身体や豊かな金髪を具えているとは言えない。そして、内面に関してもソフィアは白人的というよりもむしろ日本的と考えられる。谷崎作品ではよく西洋人女性と比べると日本人女性は陰気で暗く消極的だと言われるが、それに当てはめるとソフィアは明らかに日本人的である。エモリはソフィアの内面について「さう云へば、彼女の性質も恐ろしく陰気なやうに感ぜられる。普通の西洋人の娘とちがつて、あまり多く口数を利かない。体が不自由だからでもあらうが、いつも大人しくじつとしている。たま／＼私が声をかければ、大概な時は答への代りにたゞ微笑する」と語っている。また、エモリが日本人より更に陰気で哀れと感じている場面もあり、白人というよりは、哀れな不具者としての側面が強調されている。

このように、男主人公と男女の關係、或はそれに近い關係を築くことの出来ているソフィアであるが、白人としての性質の方に問題があり、だからこそ關係を持つことができたという見方ができるのではないだろうか。

次は、「友田と松永の話」を見ていく。この作品では、日本人である友田がスーザンをはじめとする様々な白人女性と問題なく關係を持つており、その点で例外的な作品と言える。しかし、この作品にも關係を持つことのできた理由が描かれており、それは友田の性質について確認してい

くことで明らかになる。友田は日本からまず上海に向かい、しばらく滞在し最終的にはパリで生活することとなる。その間にも明示はされていないが、白人女性を含めた多くの外国人女性と関係を持ったことが匂わされている。唯一、はっきりと名前が出ているスーザンはパリの女性で何度もその白さが強調されており、典型的な白人であることが分かる。友田はスーザンを含めて様々な白人女性と問題なく関係をもつことができている。しかし、実際には友田が西洋人になりきることで許されている関係だと考えられる。

この作品の種明かしをすると、そもそも友田には日本人である松永、西洋人の身体と気質を持った友田、そして完全に西洋人になりきったジャック・モランという三つの顔がある。元々は松永儀助という大和の国の旧家に生まれた男がおり、その特徴は「五十近い老人」のようで、「枯れ木に着物を着せたやうな痩せた」体つきをしており、「暗く、陰鬱」とされている。この松永が「田舎の旧家に育つて、古い慣習に圧迫された反動」で「極端な西洋崇拝」に目覚めた結果、衝動のままにパリへ行きそこで過ごすうちに「全く『西洋』に同化し」たのである。そして、その姿の時に名乗っていた名前が友田である。さらに、「同化」によって「顔つき、体つき、皮膚の色つや、眼の表情」も一変した友田がパリでもイタリア人かスペイン人に間違われるまでに変化した際に、名乗っていたのがジャック・モランと

いう名である。パリでスーザンの他多くの白人女性と関係を持つていた時は主にジャック・モランであった時だとされている。このように西洋に完全に同化する、すなわち西洋人になることのできる性質を持った友田はジャック・モラン、または友田であるときは白人女性と関係を持つことができるのである。

白人女性に憧れつつも、日本人であるが故に純粋な白人女性とは関係を持つことが許されない谷崎作品の男主人公の中で唯一西洋人になるという型破りな方法で友田はそれを克服している。しかし、友田がそのまま白人女性との関係を継続できたわけではない。友田はパリで享樂的な生活が続けるうちに、眩暈を覚えるようになり、それは特に白人の白い肌に接した時に顕著に表れるようになった。その時の様子については次のように描かれている。

さうして斯う、腕の方を見てゐる間は、唯うつとりと、魂を奪はれてゐるだけだつたが、それから次第に視線を移して、その腕よりもなほ冴えぐくと、抜けるやうに白い肩の肉づきを見たと思つたら、俄かに僕は総毛立つやうに戦慄を覚えた。僕の視神経がその肩の皮膚の異常な『眞つ白さ』に曝された瞬間、アツと云ふ間に僕はグラグラと眩暈を感じて、冷たいものがヒヤリと胸に衝き上つた。『あゝ眞つ白だな』『あゝ美しい

な』と思ふ感じが、直ちに一種の恐怖となつて、恰も高い絶壁の上から深い谷底を覗いたやうに、僕の両脚はガタガタ震えた。

このように友田は白人の「白さ」に耐えられず、日本へ帰国し再び松永として生活することとなる。友田は西洋人になりきること白人女性と関係を持つことができたが、友田自身が「眞つ白いもの、明るいものを余り見過ぎると恐くなるのは、東洋人の体質なのだ。(略)お前がどんなに白い女を愛そうとしても、お前の体質が許さないのだ。」と分析しているように、やはりこの作品でも日本人としての限界が示されていると思われる。

ここまでのところで、谷崎作品における白人女性や混血女性と男性主人公の関係性について、大きく①良好な関係を築くことができない、②良好な関係を築くことができる、③例外の三パターンに分類しながら描写の確認を行った。①に当てはまったのは、日本人男性と白人女性(又は白人性を有した存在)のパターンであり、いずれも良好な関係を築くことはできていない。②に当てはまったのは、日本人男性と混血女性、或いは混血男性と白人女性のパターンであり、どれも一定、良好な関係を築くことができていゝ。そして、関係を持つことができたのは、男女のどちらかが混血児であるからだと考えられる。しかし、②に当

てはまる作品では、女側が悪女的である場合が多く、男性は関係を持つ、または継続するために何かしらの代償を払わなくてはならない。その結果、男性側が破滅するか関係を解消せざるを得ない状況になる。これは、『痴人の愛』のナオミをはじめとした悪女的なモダンガール<sup>19</sup>と日本人男性との関係とも非常に似ている。①②の結果から、谷崎作品においては、日本人男性と純粋な白人女性は良好な関係を築くことができないということが分かる。また、それが男女それぞれの人種ごとに明確に書き分けられているということも言えるだろう。ただ、③の二作品では例外的に、日本人と白人女性が関係を持つことができていゝ。しかし、両作品ともに、関係を持つことができた理由、または関係を持ったためのハードルを下げたと思われる要因が作中で示されている。そのため、むしろ例外に当てはまる作品の考察から、日本人男性と白人女性は無条件で良好な関係を築くことはできないということがより明確化したとも言えるだろう。

各作品の考察から日本人男性と白人女性は良好な関係を築くことができないということと、それが人種のカテゴリーごとに明確に書き分けているということが分かった。さらにそれに加えて、もうひとつ明らかになったことがある。細江氏<sup>20</sup>は白人女性について男性主人公に「死や恐怖や破滅を齎す存在」と大きく定義しているが、男性主人

公が受ける害(死・恐怖心・破滅等)やその意味合いもこれまで分類したカテゴリーごとに異なる傾向にあり、より細分化して示すことができると考えられるのである。

まず、①に当てはまる白人女性のうち人外の存在は男性主人公に死を齎すことのできる存在である。しかし、これに關しては白人女性としての側面だけでなく人と交わらない人外の存在としての側面が強く出た結果とも考えられる。また、「人魚の嘆き」の人魚は人間に死を齎す力を持っているが、作中で人魚自身がその力を行使しようとする場面はない。むしろ男性主人公に自分から離れるように忠告して、男性主人公がそれに従い人魚から離れたからこそ無事死なずに済んだのである。一方「白狐の湯」では、男性主人公が自ら人外の白人女性に近づいて行つたために、狐に騙され殺されることとなるのである。

次に、純粹な白人女性であるニーナとシユレムスカヤ夫人についてであるが、この二人が男性主人公に能動的に害を与える描写はない。確かに男性主人公は接触恐怖を感じるが、それは男性主人公が白人女性のことを強く崇拜しており、自分が触れることで白人女性を汚してしまうのではないかという恐れを抱いたが故に生じた恐怖である。そのため、白人女性が進んで恐れさせたというニュアンスとは異なる。

男性主人公に対して能動的且つ、直接的な被害を与え

たのは、主に②に当てはまる女性達である。「肉塊」のグランドレンは、主人公を自ら誘惑し家庭を崩壊させたうえに、職場の映画会社でも好き放題に振舞い、周囲の人々の主人公への信用をなくさせ経済的にも破滅させた。「蓼喰ふ虫」のルイズは、作中では明確な害は与えていない。しかし、前述の通り、要がルイズとの關係を継続するために、お金が必要である。また、それに加えて、要に大金を要求している描写がある。ここでは、自分に惚れているのならば千円くらい出すべきであり、出せないのならば優待しないとまで言っている。要はルイズの魂胆や性格を理解しており、何だかんだと理由をつけてその分の金は渡してないので、大きな被害は受けていないが、ルイズが男主人公に害を与えようとしていることにはわりはないと考えられる。

次に、「本牧夜話」では、自分を庇つて顔に大火傷を負つたセシルに対して、ジャネットは冷淡な態度をとりすぐにセシルと同程度の経済力を持つたフレデリツキと付き合うようになる。そして、セシルは顔の火傷の痕とジャネットに振られたショックで家に引きこもるようになる。この時点で、ジャネットはセシルの人生をかき回して滅茶苦茶にしたと言えるだろう。そのうえ、最後にセシルがジャネットに復縁を頼みに行つた時も、セシルを強く拒絶し嘲ることと精神的に追い詰める。その結果として、セシルがジ

ヤネットを道連れにして自殺をしたため、直接ジャネットが死を齎したというわけではないが、セシルの人生を破滅させたのはジャネットの存在だと言えるだろう。「一房の髪」では、オルロフ夫人が三人の男に散々貢がせそれぞれの人生を破滅させている。

このように②に当てはまる女性たちは男性主人公から自分の利益になるものを搾り取ろうと積極的に動く。その結果、男性主人公の人生が破滅したり、女性側からして利用価値のなくなった男性主人公が捨てられ病んだりするというパターンに陥る。③の「友田と松永の話」では、前述の通り友田がスーザンの肌を恐怖を覚えていた場面がある。しかし、これはスーザンが意図したものではなく、友田が勝手に「眞つ白な」ものに恐怖を覚えるようになったためである。

以上から、次のようにまとめることができる。白人女性とは、日本人の男性主人公に害を及ぼす場合もある。それは、「白狐の湯」のように、男性主人公が、周りが止めているにも関わらず自ら白人女性に近づいた場合である。しかし、それ以外は、白人女性は直接的には日本人の男性主人公に害を及ぼすことはなく、むしろ、男性主人公の方で、白人女性に対する近寄りたさや恐怖を感じているのみである。その意味で、白人女性が能動的・積極的に日本人の男性主人公に害を与える行為をすることはないと整理でき

る。それに対して、白人女性が混血の男性主人公と接する場合、あるいは、混血女性が日本人の男性主人公と接する場合には、常に、女性主人公は、男性主人公から利益を得ようと働きかけ、その結果として、男性主人公は何らかの害を受ける。その意味で、これらの場合には、女性主人公は能動的・積極的に男性主人公に害を与える行為をしていると整理できる。このように、女性主人公から受ける男性主人公の被害について比較するならば、そこからも、谷崎作品において、白人女性は、男性主人公にとって、良好な関係を持つことも、容易に接することもできない、それ故に、時に恐怖をもたらす存在であったことが分かる。それは、手の届かない、理想化された特別な存在として白人女性が位置付けられていた、ということの意味している。細江氏は、混血女性や西洋人的な日本人女性も含めて、白人女性と定義しつつ、その白人女性を「死や恐怖や破滅を齎す存在」と一括りにして述べていた。しかし、混血女性や西洋的な日本人女性と白人女性とは、男に齎す「死や恐怖や破滅」の意味が異なっているし、「人魚の嘆き」の人魚のように、男主人公に「死や恐怖や破滅」をもたらさない場合もある。それ故、白人女性を「死や恐怖や破滅を齎す存在」と一括りにして終わるのではなく、むしろ、白人女性は、他の人種の女性とは異なっており、先述のような形で特別な存在として位置付けられていた、ということに着目

する必要がある。

二章では、改めて各作品の描写を確認することで、男性主人公との関係性ごとに女性側を分類できた。その結果、関係を持つことが許されないのは、日本人男性と白人女性のパターンだと考えられる。では、何故谷崎作品では日本人と白人が関係を持つことが出来ないのだろうか。次章では、その点に関する考察と影響を与えたと考えられる当時の社会的な風潮について確認していく。

### 第三章

二章において、男性主人公が関係を持てなかった純粋な白人女性とは、ニーナとシュレムスカヤ夫人である。また、それに西洋人になりきった友田でさえ関係を継続させることができなかったスーザンを加えて、この三者に関する描写を確認する。その結果、男性主人公が日本人と白人女性の肌の色を比べて、日本人を卑下するという描写が共通して見られた。その場面を引用して説明する。「アズ・マリア」では、エモリがニーナを目の前にした時に次のように考えている場面がある。

小柄な私はそこに立ち塞がつてゐるその胸の中に吸い込まれてゞも行くやうに感じて、自分の貧弱さが

しみぐ／＼と悲しくなつて、人種と云ふものゝ余りな相違に、不思議な恐れさへ覚へながら、鼻をついて来る香水の匂ひを避けるやうに後退りする。……あゝ、その相違が身の丈だけの相違ならいゝのだけれど、……あの白い肌の中にある白い心は、此の褐色な肌の中にある褐色な心の恋からは、とても及ばぬ高い所にあるのではないだらうか？……

また、エモリが妄想の中でニーナの手をとつた時にも次のように考えている。

此の骨張つた醜い指であの眞つ白な手の甲に茶色のしみを附けることの恥かしさに、まだ一遍も触つたことはなかつたのだ。

次に、「痴人の愛」における描写を確認する。譲治はシュレムスカヤ夫人に会い、初めて白人女性と接する喜びに打ち震えていた。また、それを「光荣」だとも感じており、夫人から握手を求められた時には、思わず躊躇したくらいであった。そして、夫人の手とナオミの手を比べて次のように考える。

そして何よりも（論者注——シュレムスカヤ夫人が）



ナオミと違つてゐたところは、その皮膚の色の異常な白さです。(略) 私は今までナオミの手を玩具にしたながら、「お前の手は実にきれいだ、まるで西洋人の手のやうに白いね」と、よくさう云つて褒めたものですが、斯うして見ると、やつぱり違ひます。白いやうでもナオミの白さは冴えてゐない、いや一旦此の手を見たあとではどす黒くさへ思はれます。

ここは、それまでナオミの西洋人らしさを褒めて可愛がつてきた讓治が初めて本物の白人女性と接することで、その人種の差を実感する場面である。そして、握手を交わした後、讓治は次のようなことを考えながらダンスの稽古をうける。

夫人が(略)私の背中へ腕を廻してワン・ステップの歩み方を教へたとき、私はどんなに此の眞つ黒な私の顔が彼女の肌に触れないやうに、遠慮したことでせう。(略) 握手してさへ濟まないやうに思はれたのに、その柔かな羅衣を隔て、彼女の胸に抱きかゝへられてしまつては、私は全くしてはならないことをしたやうで、自分の息が臭くはなからうか、此のにちやにちやした脂ツ手が不快を与へはしないだらうかと、そんな事ばかり気にかゝつて、たまく彼女の

髪の毛一と筋が落ちて来ても、ヒヤリとしないではゐられませんでした。

この後、讓治は積極的にダンスの稽古をうけるようになるが、讓治は「夫人の前に出ると、全くナオミの存在を忘れ」たとまで言つており、これに対して細江氏は「殆どナオミの事ばかり書いている『痴人の愛』の中で、讓治がナオミを忘れるのは異数の事態である。」<sup>三一</sup>と述べている。次に、「友田と松永の話」における描写を確認すると、松永が西洋への憧れを募らせながら日本のことを次のように卑下する場面がある。

僕はさう思つて東洋趣味を輕蔑した。東洋人の黄色い顔に不快を感じた。僕の唯一の悲しみは自分もその黄色い顔の持主であると云ふことだつた。僕は鏡を見るたびに、黄色い国に生れたことの不幸を感じた。黄色い国に居れば居るほど、自分の顔が一層黄色くなるやうな気がした。僕の願ひは一刻も早く、此の生ぬるい、気が滅入るやうな薄暗い国を飛び出して、西洋へ逃げて行くことだつた。

また、谷崎自身も「饒舌録」において、黄色人種と白人を對比して次のように述べている。

西洋人の白い皮膚には明るく冴えたものが映るけれども、東洋人の黄色い皮膚には深く沈んだものが映る。

(略) ちんちくりんな足の曲つたわれれくがヤンキー好みの所謂スマートな服を着けると、全く猿のやうになる。

これまでに引用した文章では、白人女性の肌は「眞つ白」で美しいものであり、それに対して日本人の肌は、「褐色」や「茶色」、「どす黒い」「黄色」といった色で表現されており、総じて汚くて醜いというニュアンスで語られている。このように、白い白人と黄色い日本人(黄色人種)を並べて、前者の方が美しく、後者は醜く劣っているという意識は、近代日本社会にもいくつも見られ、当時の人種問題とも深く関わっていると考えられる。こういった社会の流れが直接谷崎作品に影響を及ぼしたとまでは言えないが、谷崎自身もこの時代を生きた人間であり、その背景として当時の社会状況を確認することは必要だと考えられる。そのため、特に人種問題や人種に関する意識が世界的にも強まったと考えられる日露戦争前後の世界的な流れと日本社会の反応について確認していきたいと思う。

近代日本は、日清戦争、日露戦争に勝ち、アジアで初の列強国入りを果たした。しかし、急速に西洋化を実現して

いった日本が唯一越えられない壁が「人種」だったのでないだろうか。まず、日露戦争前後の人種に関する世界的な流れを眞嶋亜有氏の『「肌色」の憂鬱 近代日本の人種体験』<sup>三二</sup>を参考に確認していく。

まず、黄色人種を差別する風潮は、一八四五年頃から中国人が労働従事のため、アメリカに多く流入したことから始まる。同じ頃、アイルランド系移民を初めとした欧州移民も増加していたが、低賃金で労働を行う中国移民に労働市場を取って代わられた。そういった経緯から、中国移民はアメリカの白人やアイルランド系労働者から激しい差別や迫害を受けるようになる。そして、中国移民への偏見と同時にモンゴリアン、すなわち黄色人種への人種差別の意識が強くなる。眞嶋氏も、「ブルーメンバツハが人種五分類を発表した時点では、「モンゴロイドはあくまで自然科学的人種区分の名称に過ぎなかったものの、十九世紀中葉以降、英国や米国では、「モンゴリアン」には、「先天的精神障害」や「ダウン症」を指す意味合いが込められるようになり、その起源は、同時期に多く渡来した中国人を「人間性を失格した存在」とみなしていた人種偏見と無関係ではなかった。」と、中国移民への偏見と黄色人種への差別の関連性について述べている。また、モンゴリアンは主に中国人を指しており、この時点では、まだ日本人に対する差別は激しくはなかったとしている。

そして、日本人への差別や偏見が強くなるのは、一八八二年に中国人移民排斥法（排華法）<sup>二十三</sup>が可決された後だとする。排華法の可決により、中国人移民は徐々に減少していったが、その代わりに労働力として日本人が多く渡米するようになるのである。そして「もともと中国人に向けて形成された「モンゴリアン」に対する人種偏見が、日本人にも向けられるようになる」<sup>二十四</sup>のである。ここまでは、主にアメリカにおいて黄色人種差別が始まった経緯について確認してきたが、これが世界中に広まり、更に日本人に対する蔑視が強くなる契機となったのは、一九〇四年の日露戦争における日本の勝利である。日本は日露戦争に勝ったことで列強国として国際社会に台頭した。その華々しさの一方で「唯一の『有色人種』として」<sup>二十五</sup>、列強国が中心に進められる国際政治の場で自国の権利のために闘う必要があった。また、欧米社会では、日本の国際社会進出によって白人の黄色人種への蔑視や反日感情は強まりを見せていた。

この状況に対して、日本社会は様々な反応をしたが、より近くで欧米社会や白人に接していたエリート層は特に、白人との身体的差異を嘆くものが多かったという。眞嶋氏は「日露戦争を契機に見られ始める日本人の背丈や体格、容貌や肌の色をめぐる自己醜悪視は（略）多くのエリート層にみられた。」とし、西洋人との身体的差異は、「エ

リート層にとっても人種の差異を示すひとつとして認識されていた」と述べている。具体的に言うと、当時の日本人男性と西洋人男性の平均身長では、約十センチの差があり、西洋人女性の平均身長と比べてもまだ日本人男性の方が低かった。そして更に、「多くの日本人エリートにとって洋行や留学とは、自分の小柄さを痛感させられ、西洋人に対して外見的威圧感を抱く体験の連続であった」と述べる。言い換えると、日本人は特に背丈や肌の色、容姿などの可視的な差異からより強く西洋人との人種の境界を感じたということである。

西澤は、報知新聞の前身である郵便報知新聞の社員であり、明治初期という比較的早い時期にロンドンへ行っている。そして、様々な人から西洋の土産話を聞かれた経験から、『欧州の風俗 社会進化』<sup>二十六</sup>という一冊の本にまとめて西洋のことを紹介している。その中で、西洋人の相貌骨格について次のように語っている。

先づ英国より申さは私共が倫敦に到着の第一に快からず感じたるは自分等の身材の矮くき事に候／町中にて行き違ふ人もすれ違ふ人も皆な己れより二三寸乃至四五寸高きにあらざるはなく向ふより小さな子供上がりの若者が來居れば是こそ我よりは低かるべしとすれ違ひさまに肩を較べ見れば矢張先方の乳

までしかなし／又其次に如何にも残念なるは先方の人々の血色の実に際立て壮健し氣に亦た綺麗なることなり／(略)余等平日打寄りては「学問技芸の及ばざる事は勉強して之を学ばゞ到底追付かれぬと云ふ道理なし／唯た勉強にも能はぬは身材の事なり(下略)

西潁は、白人と比べ自分たち日本人の背が低いことを快く感じないと述べている。そして白人との身体的差異について努力ではどうしようもないことだと嘆いている様子が見られる。眞嶋氏は日本人エリートに見られる自己醜惡視は日露戦争が契機となつて始まると述べているが、早い時期に洋行して実際に白人の世界で過ごした西潁には、日露戦争前に既に自己醜惡視的な考え方が見られる。

一九〇四年二月に始まつた日露戦争は翌年の九月に終わったが、正にその真つただ中に島田軍吉<sup>二七</sup>は、白人について次のように述べている。

西洋人は己れを白哲人種と称し東洋人を黄色人種と呼びて己れ自ら世界第一の人種と誇り黄色人種と云へば野蠻の代名詞なるが如く妄計し東洋人を擯斥するが、白人果して優等にして黄人果して劣等なる乎(略)日露戦争は廿世紀の序幕である黄白人種の優劣比べである／言はゞ露人は白人全体の代表者で日本

は黄色人の代理者である(略)然に其結果は如何／黄人果して劣等なるか白人果して優等なるか／事實は全く之と正反對で白人も黄人に対しては顔色がないではないか／彼等は体格の強大なるに誇りしが今や矮小なる我兵の為に切り立てられ(略)右往左往に満州を退却したる御手際では余り体格の強大も自慢は出来ぬ／

島田は、白人の代表であるロシアが黄色人種代表の日本に戦争で苦戦しているということから、白人の方が優秀という当時一般的だった見方は誤つていと述べている。その一方で体格的には勝つている白人が小さな日本人に負けていると皮肉を言っている部分もあり、白人と日本人の体格差については認めていることが読み取れる。

次に韓国併合が為された一九一〇年に、社会主義者であり、女性解放運動にも積極的に関わつた安倍磯雄という人物が書いた『婦人の理想』<sup>二八</sup>の内容を見ていく。この本では、将来の国民の母である婦人が冷淡な扱いを受けていることに抗議をし、婦人達自身にも自覚を持たせることを目的としている。その中で、白人女性を引き合いに出している箇所があるので、次に引用する。

若し日本人の理想的婦人が小さい、弱い、白い神経

的なものでありとすれば、欧米人の理想的婦人は大きい、強い、紅い、快活なものであると言ふて差支あるまい。身体の各部が適當なる運動によりて充分なる発達をなせば、身長も伸び、姿勢もよくなり、筋肉も引締り、皮膚も光沢を増し、挙動も快活となり、顔色も紅を表はす様になる。(略)吾人が今日体格美に於て白人人種に劣つて居るのは決して白色とか黄色とかいふ色の問題ではない。寧ろ骨格、姿勢、容貌等に於て劣つて居るのである。若し吾人にして遅ましき骨格、優美なる姿勢、威風堂々たる容貌を有するに至れば、顔色の少しく黒い位は殆んど顧みるに足らない。

安倍は白人女性と日本人女性を比較し、体格や姿勢、容貌の点で劣つていと認める。しかし、それは肌の色等といった変えることのできない差ではなく、「適當なる運動」を行い、身体が「充分な発達」をすれば、すぐに追いつくことのできる問題だとしている。また、安倍は「今後の戦争は最早個人的ではなくて、国民的若しくは人種的である。優秀なる知識と道徳とは言ふまでもなく其基礎を体力に置くものであるから、健康と耐久力を最も多く備ふる所の国民が最後の勝者たることは明である。吾人は此点より見ても婦人の体育を激励せざるを得ない。」とも述べてお

り、将来の国民の母である婦人が健康に発達することが、日本国民全体の体力を底上げすることに繋がるとしている。そして、日本の婦人の目標として白人女性を挙げているのである。

次に、立教大学の初代学長で日本聖公会監督主教も務めた元田作之進<sup>三十九</sup>は第一次世界大戦中の一九一六年に『善悪長短日本人の心の解剖』という本を書いている。この本では、日本人の長所についてだけでなく、短所についても忌憚なく語っている。その中でアメリカにおける日本人への差別問題について触れている次のような箇所がある。

日本人が米國太平洋沿岸に於て白人労働者より排斥を受くるのは、多くの原因があるが、其一は日本人の手足が器用であると云ふ事に歸するのである。果実を採集するにも綺麗に採集して(略)地上のものを取るにも足が自由に屈曲して苦もなく仕事をする。

(略)従つて地主や園主は日本労働者を歓迎する、従つて白人労働者は自然に其労働を奪はれんことを恐る。(略)凡て日本人は力ですることとは西洋人に劣るが、術でやることは西洋人よりも上手である。

元田は、アメリカにおける日本人差別について、日本人は

元來手足が器用であり、丁寧な仕事をするため雇い主に重宝される。だからこそ、白人労働者に疎まれ差別されるのだと述べている。元田は力に關しては白人に劣ることを認めたくえで、それを補う日本人の長所として手先の器用さを挙げているのである。

「是丈は心得おくべし」シリーズで有名な加藤美倫は、『世界における珍らしい話と面白い噺』<sup>三十一</sup>の中で、日本人の背がなぜ低いのか、学術的な視点も織り交ぜながら説明している。身長ごとに人種を四つに大別し、それぞれに当てはまる人種の代表をいくつか紹介しているのだが、まず、最高人種に当てはまるのが、イギリス人で、平均身長は一七六・〇四センチである。次に高人種として、イタリア人とギリシヤ人を挙げる。低人種としては、フランス人、スペイン人、ロシア人、中国人を紹介している。そして、最低人種に当てはめているのが、日本人で、平均身長は一五七・五六センチとしている。これは、低人種の中で一番下に置かれている中国人と比べても約五センチ低い。加藤は日本人について「常に身長ばかりでなく、体重も外国人より劣り、その体力も弱い。此等の事實は本邦人自らも認めて居るけれども日本人同士ではさほどに思わぬ。併し一たび外国人と並び立つと情けない心地がする。(略)実に我が国人の姿勢を醜くするのは矮小で、同胞が外国に於て、侮辱せらるゝことあるのも、一つは矮身短軀の故であ

る。」とも述べており、身長を初めとした体格の面では日本人が劣つてゐることを認めている。更に、日露戦争で日本が勝利したことに關しても、島田のように樂觀視はしていない。加藤は、日露戦争で日本が強かつたのは「民族性が強固」であつたためだとし、だからといって体格差を気にしなくてもよいわけではないと述べる。そのうえで、「一般に日本人の矮小なるのは、種族的性質で如何ともするこゝとが出来ぬといふ人もあるけれども、生物学上から言へば、種族的特徴でも、決して改造せられぬ理由はない。」とし、日々の習慣を改善することで徐々に体格も改善することが出来ると主張する。加藤は、人種による体格の差は認め、それ自体は仕方のないことだと考えている。しかし、時間がかかるが改良できることとし、そのために日々の習慣の改善の必要性を訴えている。

最後に、病理学の専門家で医者でもあつた田中香涯<sup>三十二</sup>は、関東大震災が起つた一九二三年に「白人種の生理的一大弱点」と称して次のように述べている。

(上略) 彼等が未開野蛮の人種として侮蔑せる有色人種よりも遙かに劣つてゐる点がある、それは何かと云ふに、風土馴化能力 Akklimatisationsfähigkeit の甚だ不完全なることである。(略) 彼等の蔑視する支那人の如きは(略) その風土馴化能力の強大なることは実

に驚嘆するの外はない。(略)然るに独り白人種のみは如何に其の能力を傾倒しても熱帯の風土に馴化することが不可能である、あゝ温帯地には住棲するを得るも、熱帯に永住すること能はず、また、その純粹なる種族を残すことの出来ない白人種は、真の意味に於て世界全体を征服するの資格なきものである。

田中は、「洋人を崇拜し、欧風に心酔する同胞」が見たら、驚嘆するのであろう事実として、白人の一大弱点、すなわち風土軟化能力の不完全性を挙げてゐる。ここでは、白人の短所を学術的な面から明らかにしているが、その根底には日本人を蔑視する白人に対する反発があると思われる。

ここまで、いくつかの資料を確認してきたが、その殆どで白人の体格や体力が日本人(黄色人種)より優れていることについて言及されている。そして、西湖や加藤は矮小な日本人の体格について情けないと述べており、そこからは一種の劣等感のような感情が読み取れる。また、安倍は白人女性の体格や容姿を賞賛しており、日本人女性の目標として位置付けている。このように、白人の体格や体力を称賛したり、それと日本人の矮小さを比べ嘆いたりする意見がある一方で、白人に対する反発も多く見られる。前述の通り、日本人(黄色人種)が西洋人と比べると、体格や容姿の面で劣っていることは殆どの資料で認められてい

る。しかし、そのような身体面でのハンディキャップがありながらも日露戦争に勝利した日本を誇るような意見や、日本人の長所を体格以外に求める意見があった。また、安倍や加藤は日本人の体格や容姿が白人と比べ劣っているのは習慣によるものであり、健康的な身体作りをしようと努力すれば、矯正可能であるということを示し奨励している。こういった意見はここで挙げた資料以外にも見られ、特に日露戦争後は増加しているのだが、そこからは、日本人と白人との間の人種的差異は認めつつも、それによる人種的格差は認めないという当時の人々の気持ちを読み取れる。

ここまでのところで、人種問題に関する日露戦争前後の世界的な流れと白人に対する当時の日本人の意見についていくつか確認してきた。次にそういった時代背景や当時の社会の風潮と谷崎作品における白人女性の描かれ方について比較したいと思う。それによって、谷崎作品独自の白人女性の描かれ方はないのか確認する。

共通点としては、まず白人の体格や容姿に対する称賛が見られる。白人に対して好意的な意見は勿論のこと、批判的な意見の中でも、白人の体格や容姿が優れていることについては認めているくらいである。同様に、谷崎作品においても白人女性の容姿を賛美する描写が多く取り入れられており、その中でも特に「白さ」への憧憬は強調されている。次に、そのように優れた容姿を持つ白人と自分(日

本人)を比べ、劣等感を持つたり、自身の容姿を嘆いたりする様子が共通点として挙げられる。谷崎作品では、白人女性は憧れの存在であるが故に近づくも難くもあり、それは自分が黄色人種であり、醜い存在であるからだとされていく。大まかにこの二点が共通点として挙げられるだろう。

次に、相違点としては、「反発」の有無が挙げられる。

白人に対して共通点に挙げられているような比較的良好な感想を抱いていた日本人もいただろうが、特に日露戦争を経て世界的に排日的な機運が高まってきてからは、日本では白人に対する反発が生まれるようになる。さらにアメリカでは、一九二四年に排日移民法が成立するなど、日本人に対する差別や蔑視は強まりを見せ、それがより白人に対する反発を強くさせたと考えられる。そして、歴史的にも、この後どんどん孤立していくこととなる日本(日本人)に対する風当たりを考えると、反発が生まれ、強まることは自然なことだと考えられる。しかし、積極的に白人女性について描き、作品によっては白人女性に日本人の男性主人公がひどい扱いをうけるものがあるにも関わらず、谷崎作品には白人に対する反発や批判は全く見られない。では、なぜ谷崎作品にはそういった描写が見られないのだろうか。その理由については次章で考察したいと思う。

## 第四章

第三章では、日露戦争前後の日本における人種問題や白人に対する認識を確認した。そして、谷崎作品における白人女性の描かれ方との共通点と相違点について考察したが、本章では、相違点にあたる谷崎作品に白人に対する反発が全く見られない理由について考えていく。

まず、直接的な要因とは言えないかもしれないが、白人への反発が全く描かれていない理由として考えられるものを三点挙げる。一点目と二点目は作者である谷崎自身に関することであり、三點目は谷崎作品の描写から考えられる理由である。では、説明する。まずは、谷崎が政治的なことがらや思想を作品に描くことがほとんどないためという理由である。実際に谷崎作品に政治的なことがらや主張が描かれることはほとんどなく、自身の作品が連続で発売禁止になった時に、検閲の方針に反発する気持ちから描かれた「検閲官」(大正九年一月『大正日日新聞』)や、「発売禁止に就て」(大正五年五月『中央公論』)が政治関連のことがらにわずかに触れたくらいである。そもそも、日本人が反発心を抱くようになるのは、日露戦争以後加速した人種差別によるところが大きい。しかし、あまり政治的な事柄にはあまり興味がなく、ほとんど作品に描くことの



なかつた谷崎だからこそ、社会的に人種差別への反発（白人への反発）が起つたとしても、少なくとも作中では表すことはなかつたのではないだろうか。

次に、谷崎自身に洋行経験がないためという理由が考えられる。谷崎は西洋に憧れ、洋行を夢見ていたが、谷崎が海外に滞在したのは、一九一八年と一九二六年の中国のみであり、西洋に行ったという記録はない。横浜に住んでいた時期もあるので、白人に会う機会はいくらでもあつただろうが、実際に周りが白人しかいない環境で過ごしたことはない。例えば、夏目漱石は英国留学時に、周りが白人ばかりの環境で劣等感や孤立感を抱いたということを「文学論」（一九〇七年五月）<sup>三二</sup>で述べている。また、当時の日本人男性の平均身長であつた漱石は、ロンドンでは、常に白人に見下ろされる生活を送つたと考えられる。その時の様子は「倫敦消息」（一九〇一年『ホトトギス』）<sup>三三</sup>で次のように語られている。

向へ出て見ると逢う奴やつも逢う奴も皆んな厭に背  
いが高い。おまけに愛嬌のない顔ばかりだ。こんな  
国ではちつと人間の背に税をかけたら少しは儉約  
した小さな動物が出来るだろうなどと考えるが、  
それはいわゆる負惜しみの減らず口と云う奴で、公  
平な処が向うの方がどうしても立派だ。何となく自

分が肩身の狭い心持ちがする。向うから人間並外れた低い奴が来た。占たと思つてすれ違つて見ると自分より二寸ばかり高い。こんどは向うから妙な顔色をした一寸法師が来たなと思うと、これすなわち乃公自身の影が姿見に写つたのである。

漱石だけでなく、実際に洋行した人たちは体格や容姿で勝る白人の中に、日本人として飛び込むことになり、孤立感や劣等感を強く抱かされただろう。また、差別や蔑視にあう機会も非常に多かつたと思われる。しかし、谷崎は洋行をしなかつたことで、そのような経験をする機会がない、もしくは非常に少なかつたと考えられる。このように、単純に身近なところで、直接白人に反発を覚えるような出来事がなかつたため、白人の良い部分だけがより強調されて見えていたという可能性も考えられるのである。

最後に、谷崎作品には「美しい者は強者」というテーマが初期から通底しているためという理由が考えられる。谷崎作品にはしばしば美しく強い悪女的な女性が登場する。谷崎が文壇デビューをするきっかけとなつた「刺青」の冒頭には次のようなことが書かれている。

其れはまだ人々が「愚」と云う貴い徳を持つて居て、  
世の中が今のように激しく軋み合わない時分であつ

た。殿様や若旦那の長閑な顔が曇らぬように、御殿女中や華魁の笑いの種が盡きぬようにと、饒舌を売ってお茶坊主だの幫間だのと云う職業が、立派に存在して行けた程、世間がのんびりして居た時分であった。女定九郎、女自雷也、女鳴神、——当時の芝居でも草双紙でも、すべて美しい者は強者であり、醜い者は弱者であつた。

前田久徳氏<sup>三四</sup>はこの一文を引いた上で、この「規律にしたがつて展開される世界を、鮮烈な色彩感でうたいあげたこの作品は、(現実吐露)を標榜する自然主義文学が席捲した当時の文壇に異彩をはなち、あたらしい文学者の誕生を告げるに充分な個性に満ちていた。また作家に即せば、これ以後半世紀以上も続く彼の創作活動を貫く文学的主題がすでにこの一篇に鮮明に記されてい」と続ける。確かに谷崎はこれ以後様々に作風を変遷させていくが美しい悪女的な女性に男性が拝跪するという構図は後年まで続く。また、これに関して千葉俊二氏<sup>三五</sup>は、「谷崎文学には生涯を通じて、被害願望と死の恐怖という二律背反のモチーフが繰り返され、谷崎が夢想する究極の願望は、自己の理想とする女性に殺害されて、その足下に「死骸」として横たわりながら、なお意識のみはその女性を仰ぎ見るといふ構造のうちにある」と指摘する。このように美しい女性

は強者であり、その女性の足下でひれ伏したいという願望を持った男性が多く登場する谷崎作品では、それ自体が一つのテーマとなつている。こういった谷崎文学のテーマに従えば、美しい白人女性は男性主人公にとっては見上げるべき存在であり、むしろひどく扱われると幸福に感じるはずである。当然、それに対して男性が反発を覚えたり、批判したりするようなことはない。

ここまでのところで谷崎作品において白人に対する反発や批判がない理由について、三点挙げた。これらはいくつかある理由の中の一つであると考えられる。しかし、これらの理由の他に、白人女性を描くうえで谷崎の問題意識に通じるような要因は考えられないだろうか。それは例えば、谷崎が白人女性を当時の一般的な認識から外れた別の「何か」と重ねて見ていたという考え方である。このような仮定の下、本論ではその「何か」を母、或いは母的存在と考えて考察を続けたいと思う。なぜかという点、谷崎作品において、母は、非常に崇高な存在であり、白人女性に母的な要素を見出して作品に描いているのであれば、批判や反発が描かれていないのも、白人女性が特別な存在として描かれているということについても納得できるからである。

ここでいう母的な存在とは、母或いは母に準じる人物を指す。谷崎文学の一つの柱として「母性思慕」というテ

「マがあり、特に古典回帰後の昭和期になると、「吉野葛」(昭和六年一月〜二月『中央公論』)や「少将滋幹の母」(昭和二十四年十一月〜二十五年二月『毎日新聞』)を始めとした母恋いの物語が多く描かれている。また、随筆「幼少時代」(昭和三十年四月〜三十一年三月『文藝春秋』)では、谷崎が自身の母である関について回想している。また、千葉氏<sup>三六</sup>は白人女性を多く描いていた大正期に同じように多く描かれていたプラトニズム的作品群と「母性思慕」の関連について「少なくとも自己の文学の観念性と現実との拮抗をプラトンのイデア説の導入・援用することによって解消しようと試みた谷崎のプラトニズムは、この同時期に『アエ・マリア』作品があることから窺われるように母性思慕の念に裏打ちされたものであって、この母性思慕こそが前期から後期への変化の中にあってもそれを貫く一本の太い糸となっていることは誰しも認めざるを得ぬだろう。」と述べ、「母性思慕」が谷崎作品において一貫した大きなテーマであったと指摘する。

しかし、ここで留意しておかなければならないのは、母が現在の母とは必ずしもイコールではないということである。一章で紹介した通り、細江氏も白人女性と母の関連性について指摘しており、更にここでいう母について『女の顔』における谷崎の発言を引用しながら「谷崎にとつて『若く美しい』母は、『空想の中の母』であつて、中年以

降の谷崎の母「関」の実像にさえどの程度似ているのかも分からない谷崎の理想のイメージに過ぎなかったという事実である。」と論じている。細江氏のこの論を更に裏付けるのは、「母を恋ふる記」(大正八年一月〜二月『東京日日新聞』)におけるストーリーである。

「母を恋ふる記」では、主人公が夢の中で七、八歳の姿に戻り、不思議な街道を彷徨う中で母と会うという物語である。その中で、田舎のお媼さんが登場し、主人公はそれを母と思ひ話しかける場面があるのだが、そこではそのお媼さんは「白毛交り」で「頬にも額にも深い皺が寄つた姿で描写されている。しかし、結局その人は母ではないことが分かつたため、主人公が歩き続けていると、今度は主人公が「姉さん」と呼びたいくらいに美しくうら若い女に出会う。そして主人公はその女に言われて初めて自分の母であることに気づく。その時主人公は「母がこんなに若く美しい筈はないのだが、それでもたしかに母に違ひない。どう云う訳か私はそれを疑ふことが出来なかつた。私はまだ小さな子供だ。だから母がこのくらゐ若くて美しいのは当たり前かも知れない」と考える。

この話におけるお媼さんと若く美しい女の対比は、まさに現在の母と過去の母の対比だと考えられ、ここで主人公が若く美しい女を自分の母としたということは、やはり主人公が求めているのは過去の母だと考えられるのであ

る。この作品だけではなく、他の母、或は母的な存在が登場する作品においても老いた母として描かれることはほとんどなく、美しく若さを保った人物として描かれることが多い。また、谷崎は随筆等で自身の母を語る際には、自分が幼い時の関の美しさについて良く言及する。こういった点から、谷崎文学における「母性思慕」をテーマとした作品で主人公に求められる母は、例外を除けばそのほとんどが「自分が幼い頃の若く美しい母」と考えることができるだろう。

ではなぜ、白人女性と母（日本人）という一見正反対のように考えられる人物のイメージが重なると考えられるのかというと、谷崎作品における母的な存在の描写と白人女性の描写で共通点がいくつか見られるためである。特に顕著な共通点としては、肌の白さと境界の向こう側の存在であるという二点が挙げられる。

まずは、肌の白さについて本文を挙げながら確認していく。白人女性の肌の白さについては、既にいくつか確認してきたが、改めて母的な存在と比較するために見ていく。ここで対象とする白人女性は、「人魚の嘆き」の人魚と「白狐の湯」のローザ（狐）、「アエ・マリア」のニーナとソフィア、「痴人の愛」のシユレムスカヤ夫人、「友田と松永の話」のスーザン、『一房の髪』のオルロフ夫人である。<sup>三七</sup>では、簡単に確認していくと、人魚は白過ぎて

「照り輝」いており、ローザ（狐）も人間とは思えないくらい「眞つ白」だと言われている。そして、ニーナの肌も何度も白いと言われており、シユレムスカヤ夫人の肌は譲治に「異常な白さ」とまで言われている。また、スーザンは友田がパリで出会った女性たちの中でも特に白い肌をしていると言われており、オルロフ夫人もやはり「眞つ白」とされている。やはり、谷崎作品に登場する白人女性は肌の白さが強調されている。

次に肌の白さについて、母的な存在の描写を確認する。

谷崎文学における「母性思慕」がテーマの作品としては早い時期に書かれた「母を恋ふる記」（大正八年一月〜二月『東京日日新聞』）では、うら若い女（母）の特徴として襟足や手首、顔等身体の様々な部分が「眞つ白」ということが挙げられている。また、「吉野葛」の津村の記憶に残っている母らしき人も「色が白」といわれており、「盲目物語」（昭和六年九月『中央公論』）のお市の方は元々白かったのが、日の当たらない奥の間で長い間閉じこもっていたことで、余計に白くなったと言われている。「夢の浮橋」（昭和三十四年十月『中央公論』）の母と義母は二人とも肌が白いとされており、「幼少時代」（昭和三十年四月〜昭和三十一年三月『文藝春秋』）では、谷崎が幼い頃の母は、じつと見ていると際立ってくる白さだったと回想されている。ここまでのところで確認できたように、や

はり母的な存在も肌の白さが強調して描かれている。

次に確認する共通点は、境界の向こう側の存在と感ぜさせるといふ点である。まず、白人女性については、そもそも日本人にとっては、国も人種も言葉も異なる存在であり、そういう意味では海の向こうに住む別の世界の存在だと言えるだろう。また、例えば「アヱ・マリア」のエモリや「痴人の愛」の譲治は、それぞれ白人女性に憧れると同時に「近づき難い存在」だとも感じている。それは、容姿の違いをはじめとした人種の差によるものとされており、自ら境界を引いている様子が見られる。

次に母的な存在について確認していく。まず、谷崎作品において求められる母が、自分が幼い頃の若く美しい母であることは既に指摘した通りである。それに従って考えると、男性主人公が成人した頃には既に母は老いており、自分が求める若く美しい母は既に失われている。また、単純に男性主人公の年齢によつては、母が既に亡くなっている可能性もある。こういった点から、男性主人公の求める母は別世界にいる存在と考えることができる。また、仮に「夢の浮橋」のように、男性主人公が成人した後も、義母という形で若く美しい母が近くにいる場合もあるが、母と成長した息子の間には母子間で関係を持つてはならないというタブーが働いているはずであり、ある種の境界が引かれているとも考えられるだろう。このように、白人女性も

母的な存在も男性主人公に異なる世界の存在と感ぜさせる要素を具えており、この点が共通していると言える。

ここまでのところで、谷崎作品における母的な存在の描写と白人女性の描写との共通点として、肌の白さと境界の向こう側の存在という二点について確認してきた。その他に、個別の作品で見られる共通点として、先行研究では匂いを挙げている。細江氏<sup>三十一</sup>は「痴人の愛」におけるシユレムスカヤ夫人の「香水と腋臭の交つた」匂いと多くの作品で描かれる母的な存在の「甘い乳房の匂い」について関連があると述べている。確かに、白人女性の匂いに関しては、シユレムスカヤ夫人だけでなく、「アヱ・マリア」でもニーナの匂いについての記述が見られる。そして、母的な存在の匂いに関して細江氏は「主人公が母と再会したり、母の代用品となる女性を獲得したりする場面で、匂はその女性が母であることの印として用いられている」と指摘しており、母的な存在の一つの要素だと考えられる。作品にもよるが、匂いも白人女性と母的な存在で共通した描写のひとつだと考えられるだろう。

ここまでの確認作業で、白人女性と母的な存在の描写に共通している箇所があることが分かった。しかも、肌の白さと境界の向こう側の存在という点については、白人女性と母的な存在の象徴的な特徴として描かれている部分であり、意図的に共通点として描いていると考えられるだろ

う。そうであれば、谷崎が白人女性の内に見ていたのは母、或いは母的な存在といえるのではないだろうか。谷崎が白人女性の内に母を見るという独自の感覚を持ち、それを作中で描いていたのだとすれば、白人女性が反発の対象とならないのも納得できる。また、純粋な白人女性が男性主人公と関係を持つことができないという点や白人女性が他の人種のカテゴリの女性と比べて特別な存在として描かれていた点に関しても、白人女性の中に母という要素があったと考えると自然である。

ここまでで、谷崎作品において、白人女性が特別な存在として描かれたり、その描写に当時の世間一般的な白人に対する認識とのズレが見られたりする要因のひとつとして、白人女性と母の関連が考えられるということが確認できた。

ところで、昭和初期に古典回帰の傾向を強めて以降、谷崎作品の中で、白人女性は殆ど描かれなくなる。その一方で、昭和初期以降、母を取り上げた作品は頻出する。このことは、白人女性を描きつつ、その中に母の存在を密かに見出していた谷崎であったからこそ、西洋崇拜熱が冷め、古典回帰の傾向を強めるようになった時、白人女性を描く代わりに、母なる存在を描くようになった、ということの意味しているのではないだろうか。先述の通り、白人女性と母の間には、肌が白いという点、境界の向こう側の存

在であるという点で共通性があった。そのため、白人女性を描く興味が失われた時、それに代わるものとして、母なる存在を描く興味が顕在化してきたと考えられるのである。

勿論、白人女性と母なる存在との間には相違点もある。それは、前者の肌の白さが、明るさや透明感を強調したものであったのに対して、後者の肌の白さには翳りがあるとされているという点である。そのことは、例えば、「陰翳禮讃」（昭和八年十二月）昭和九年一月『経済往来』において、次のように記されていることから確かめられる。

われ／＼とても昔から肌が黒いよりは白い方を貴いとし、美しいともしたことだけれども、それでも白哲人種の白さとわれ／＼の白さとは何処か違ふ。と云ふのは、日本人のはどんなに白くとも、白い中に微かな翳りがある。(略)ところが西洋人の方は、表面が濁つてゐるやうでも底が明るく透きとほつてゐて、体中の何処にもさう云ふ薄汚い蔭がさ／＼ない。頭の前から指の先まで、冴え／＼と白い。だから彼等の集会の中にわれ／＼の一人が這入り込むと、白紙に一点薄墨のしみが出来たやうで、われ／＼が見てもその一人が目障りのやうに思われ、あまりいゝ気持がしないのである。

ここでは、白人の肌を「冴えぐくと白く」「明るく透きとほつてゐる」とし、それに比べると日本人の肌は白くても翳りがあると述べている。実際に、作中の描写を確認すると、白人女性の白さには「眞つ白」や「抜けるやうな白さ」、「異常な白さ」といった表現が使われ、人物によつては「白過ぎて照り輝く」とまで言われている。また、ここに書かれているような日本人の翳りを含んだ肌の白さは、古典回帰以降の谷崎作品に登場する母なる存在の描写にも取り入れられている。実際に確認すると、母的な存在の白さの描写には「ほの白い」という表現が多く使われており、逆に「眞つ白」や「透き通る白さ」等といった白人的な白さの表現は、ほとんど見られなくなっている。また、母的な存在の描写には、単純に「白い」と表現されている箇所も多く見られるのであるが、そう表現されている人物のいる場所が日本家屋の奥の間であったり、時間帯が夜であったりして殆ど陰のある場が設定されているのである。その中で肌が「白い」、「ほの白い」と言われているということは、「陰翳禮讃」における日本的な「白さ」の説明と合致していると言える。

しかし、こうした相違があるからといって、白人女性と母なる存在が全く無関係であったと考えることもできない。先述の通り、両者には共通性もあり、白人女性の中に

母なる存在を見ていたからこそ、白人女性を描く興味が失われた時、それに代わるものとして、母なる存在を描く興味が顕在化してきたという側面は確実に存在していたと考えられるのである。そのことを裏付けるために、昭和初期の古典回帰の傾向を見せるようになった時期よりも以前に書かれた「母を恋ふる記」と「アヰ・マリア」を取り上げたい。ここで、この二作品を取り上げるのは、「母を恋ふる記」が、白人女性の白さを持った母が描かれた作品であり、「アヰ・マリア」が、母的な白さを持った白人女性が描かれた作品であるからだ。「母を恋ふる記」は谷崎の実母の死後初めて書かれた「母性思慕」がテーマとなった作品であり、古典回帰後の作品の根幹にある重要な作品だと考えられる。確認していくと、この作品の設定としては、主人公がうら若い女と会うのは、「闇夜とも月夜とも執方とも考えられるやうな晩」であり、眞つ暗ではないが「眼の前がもや／＼と霞んで居る」状態の時である。しかし、うら若い女の肌は、「ほの白い」という表現がある一方で、何度かはつきりと「眞つ白」といわれており、さらに肌が狐の毛のように眞つ白で「つや／＼とねこ柳のやうに光」っているとも言われている。このように、母であるうら若い女の肌は、明らかに白人的なはつきりとした白さが強調して描かれている。一方、「アヰ・マリア」のソフィアの肌は「青白い」と言われており、日本的に描かれている

と考えられる。また、ソフィアに関しては、二章における考察でも述べた通り、内面的にも明らかに日本的である。

また、ソフィアはエモリにとつて聖母マリアを彷彿させる存在でもあり、日本的な、母的な要素を肌の色以外にも多く持った白人女性として描かれているのである。このように、両作品では、白人女性の白さを持った母や、母的な白さを持った白人女性が、古典回帰以前の時期に書かれていた。こうした作品が存在するということは、白人女性と母なる存在が密接な関係にあったことを示しているだろう。

以上を踏まえれば、古典回帰前に白人女性の中に母を見出し積極的に描いたという経験が、後に母を描くことに活かされていると考えられるのではないだろうか。勿論、先述の通り、白人女性と母の白さの間には相違もある。しかし、その相違は、白人女性と母との結びつきを断絶するほどの相違ではなかった。そうであるが故に、「母を恋ふる記」と「アズ・マリア」のように、白人的なものと母的なものが混在する作品が生まれることもあったのである。むしろ、谷崎においては、白人女性の「白さ」を描いていくうちにそれとは異なる母的な「白さ」に関しても意識的になった可能性も十分に考えられる。だからこそ、古典回帰後の作品では、白人女性の白さとは異なる、母的な「白さ」を一貫して描くことができたのではないだろうか。

## 結 論

本論では、谷崎作品における白人女性の描写について考察をした。第一章では、谷崎作品における西洋崇拜の概要と先行研究の内容を確認するとともに、本論における白人女性の定義を定めた。谷崎作品では、多くの男性主人公が西洋への熱烈な憧れを持っているが、作者である谷崎同様に洋行の経験のある人物は殆どおらず、崇拜している西洋が皮相的である点を、先行研究を交えて確認した。そして、本論における白人女性の定義について人種に関する学術的な面と谷崎作品における記述や描写から、混血女性や西洋的な日本人女性と区別した上で、「肌の白さが描写として強調されている異国の女性、あるいは、それに類する存在」と定めた。それを踏まえて、谷崎作品における白人女性について論じた先行研究として細江氏の論を挙げ、その問題点として人種の区別がなされていない点や考察を行っている作品数が少ない点を指摘した。

そして、二章では、先行研究の問題点を踏まえて、白人女性や混血女性が登場する十作品について、男性主人公の関わり方という面からその描写を確認していった。その結果、男性主人公との関係性から三つのグループに分類することができた。①の男性主人公と良好な関係を築くこと



ができないグループには、主に対象が日本人男性と白人女性である作品が当てはまり、②の良好な関係を築くことができたグループでは、男女のどちらかが混血児である作品が当てはまった。この結果から、谷崎作品においては、日本人男性と純粋な白人女性は、男女の関係を持ったり、良好な関係を継続させたりすることはできないということが分かった。また、男性主人公との関係性が人種のカテゴリごとに明確に書き分けられていることも確認できた。そして③のグループに当てはまる二作品では、例外的に日本人男性が白人女性と関係を持つことが出来ているが、関係を持つことのできた理由が作中で示されていると考えられる。そのため、③のグループの作品の考察から、やはり無条件で日本人男性と白人女性が関係を持つことはできないということがより明確になったと考えられる。また、白人女性の齎す害という点でも、男性主人公が近づきすぎない限りは能動的に害を与えるような存在ではないということが分かった。以上の考察から、白人女性は日本人男性が簡単に近づくことができない特別な存在として描かれていると言えるだろう。そして、このような白人女性を目の当たりにした男性主人公は、自身と白人女性との間の壁の象徴として、肌の色を挙げる。

こういった肌の色に関する言論は、近代日本の人種問題や白人関連の資料にも多く見られることから、第三章で

は日露戦争前後の状況を確認していった。まず、当時の人種問題や日露戦争前後の日本の状況について簡単に確認した。そして、実際に当時の資料を挙げ、白人に対して憧れや称賛する意見がある一方で、白人による日本人（黄色人種）差別に反発する意見や、人種の差異は認めても人種的格差は認めないという意見が多く見られた。このような当時の日本人の人種や白人に対する認識や意見と谷崎作品に描かれる白人女性の間共通点としては、憧れや称賛等白人にとってポジティブな意見が挙げられる。そして、相違点としては反発の有無が挙げられる。このように谷崎作品には白人に対する反発や批判は見られず、白人女性を特別視する傾向が認められるが、それはなぜなのか第四章で考察を行った。

第四章ではまず、白人女性が絶対的な存在として描かれる理由について、簡単に考えられるものとして谷崎自身に関連したものとして二点、谷崎作品のテーマに関するものとして一点挙げた。そして、さらに谷崎が白人女性に「母」を見ており、そのため作中でも特別な存在として描かれていたという理由を仮定し、考察を行った。そして、特に肌の白さと境界の向こう側の存在と感じさせるという点について、白人女性と母（母的な存在）の描写が共通していることを指摘し、改めて白人女性は「母」を意識しながら描かれていたと考えられるということを指摘した。ま

た、白人女性は「母」を内在させているからこそ、絶対的な、特別な存在として描かれており、そのため男性主人公は白人女性と関係をもつことができないと結論づけた。

この結論に加えて、古典回帰前後の白人女性と母の立ち位置の変化について肌の白さの描写から確認を行った。結果としては、古典回帰前は白人女性が前面にでており、その描写を母のイメージが支えていたが、古典回帰後は母のイメージが前面に押し出されるようになり、谷崎の西洋離れと合わせて白人女性は描かれることがなくなった。しかし、「母」の描写に直接的な影響は与えていないとしても、古典回帰前に谷崎が「母」が内在する白人女性を積極的に描いたという経験が、両者の特徴や差を意識させたからこそ、後に純粋な「母」を描くことができたと考えられるのである。

本論では、白人女性の描写を人種のカテゴリーに注意しながら丁寧に確認していくことで、谷崎作品では白人女性が混血女性等と比べ、明らかに特別な存在として描かれているという点を改めて確認することができた。そして、その要因のひとつとして、白人女性のうちに「母」を見るという谷崎独自の感覚について指摘した。また、古典回帰後に、白人女性が描かれなくなった代わりに母が多く描かれるようになることに關しても、白人女性を積極的に描いた経験が活かされ、純粋な日本的な「白さ」を持った母を

描くことができたのだと考えられる。

谷崎作品全体の流れを考えると、しばしば古典回帰以前の西洋的な世界と古典回帰後の日本の古典的世界との隔たりが強調されがちである。しかし、谷崎作品における理想的な女性の象徴である白人女性と母の描写は、本稿における考察で明らかになったように深く繋がり、互いにその描写を支え合っていると考えられる。そのため、白人女性の描写に關しては、古典回帰以前の谷崎の西洋文化受容の問題の一部として捉えるだけでは不十分であり、谷崎文学の中で一つの柱として位置付けていく必要があるだろう。

## 注

- 一 西洋への憧れはこのほかの多くの谷崎作品にも描かれているにも関わらず、「友田と松永の話」（大正十五年一月〜五月『主婦の友』の友田以外の登場人物は洋行が実現していない）
- 二 中村光夫『谷崎潤一郎論』一九五二年十月、河出書房
- 三 岩田恵子「アヱ・マリア論」『芸術至上主義文学』五号、一九七九年

四 例えば、永栄啓伸氏は、ナオミがアメリカ映画の女優から造形されていることを指摘し、「(西洋)の洗礼は表層的であった」(『痴人の愛——追憶「お伽噺の家」——』『日本の文学』四号、一九八八年十一月)と述べる。また、中野登志美

氏は、讓治がナオミとシュレムスカヤ夫人の手を比較する場面を挙げて、「讓治は単に手の肌の白さを比較したのではなく、内面から醸し出す「白さ」の有無を比較することで、(略)相違を認識するのである。(略)つまり、讓治が本当に求めていたものは、讓治の憧憬する西洋人女性の美を体現したナオミの美しさであったといえよう。」(谷崎潤一郎『痴人の愛』論・『痴人の愛』に於ける拝跪の美学』『日本文藝研究』五十四卷三号、二〇〇二年十二月)と指摘する。このように、表面的な西洋の象徴としてナオミがよく指摘されるとともに、そのナオミが「変身」することによって、完全な西洋の体現者となるということを論じたものが多い。

五 ただし、西洋人とされている人物は、肌の白さや、背の高さや高い鼻などの白人的な身体的特徴を持った人物として多く描かれている。また、イギリス人やフランス人に限らず、ロシア人やアメリカ人も西洋人とされている。

六 藤川隆男「白人研究に向かって——イントロダクション」『白人とは何か? ホワイトトネス・スタディーズ入門』藤川隆男編、二〇〇五年十月、刀水書房

七 名譽白人とは、「アパルトヘイト下の南アフリカにおいて、日本人や一部の中国人、アメリカの黒人などに与えられた便宜的な地位で、他の非白人には認められていなかった白人と同等の処遇を多くの点で受けることのできた」人々のことである。(藤川隆男『人種差別の世界史』二〇一一年七月、刀水書房 参考)

八 杉本淑彦「白色人種論とアラブ人——フランス植民地主義

のまなざし」『白人とは何か? ホワイトトネス・スタディーズ入門』藤川隆男編、二〇〇五年十月、刀水書房

九 ジョルジュ・キュヴィエは十九世紀のフランスの博物学者で、「白人(コーカソイド)を最上級に、ニグロイド(黒人)を底辺に置く、人種の優劣に基づく階層をはじめて明確に示した」人物である。彼が考案した人種三分類法は、広く一般に流布した。(藤川隆男『人種差別の世界史』二〇一一年七月、刀水書房 参考)

十 福沢諭吉『掌中万国一覽』『福沢諭吉全集』第二卷、明治三十一年二月、岩波書店

十一 細江光『痴人の愛』論・その白人女性の意味を中心に』『國語と國文學』六十五卷四号、一九八八年四月

十二 細江氏が白人女性として羅列している人物の中には『少年』の光子や『肉塊』のグランドレンといった西洋人的な日本人女性や混血女性が含まれている。

十三 細江氏自身も谷崎作品に登場するすべての白人女性の描写を検討する必要があると指摘している。

十四 ここで言う「良好な関係」とは、例えば互いに相思相愛である状態や、身体のみ関係であっても互いに納得して関係を継続している状態を意味している。しかし、作品の設定ごとに解釈が変わってくる場合もあるので適宜説明を加える。

十五 「人魚の嘆き」の男性主人公は支那人の孟世燾であるため例外である。しかし、人種としては日本人と同じ黄色人種であり、特に白人女性との間に壁があるという点では日本人男性と大きな差はないと考える。

十六 「人魚の嘆き」と「白狐の湯」の白人女性是人外存在ではあるが、明らかに白人女性を意識して描かれていると考えられるので、白人女性としている。

十七 例えば「人魚の嘆き」の人魚は上半身について「曲線の優雅な起伏、模範的な均整を持つ腕のしなやかさ、豊潤なやうで程よく引き緊まつた筋肉」と称賛されている。また、「アヰ・マリア」のニーナは足について「圓々と隆い腿」と言われている。さらに、谷崎自身も「恋愛及び色情」において、白人女性の身体を「均整の取れた、健康な肉体」と述べている。

十八 「讀太郎」では主人公が日本人女性について「気が弱い」と述べ、「本牧夜話」では、「意気地がな」く、いつも「妙にいちけて居て、陰険で様子見振つてばかり」と日本人の性質が批判されている。また、「恋愛及び色情」では、「柔和で奥ゆかしい」日本人女性が白人女性のようになるのは、容易ではないと言われている。

十九 日本人ではあるが、西洋風の文化や生活を好んでいる女性のことである。谷崎作品ではそういった女性を若く奔放で我儘に描く傾向があり、例を挙げると「捨てられる迄」の三千子、「嘆きの門」の少女、「青い花」のあぐり、「永遠の偶像」の光子、「港の人々」のY子等がいる。

二十 注十一に同じ。

二十一 注十二に同じ。

二十二 眞嶋亜有『「肌色」の憂鬱 近代日本の人種体験』二〇一四年七月、中央公論新社

二十三 一八八〇年に中国人の渡航を制限する天津条約、一八八二

年に中国移民排斥法が制定され、そこからさらに八回に及ぶ修正が加えられ、一九〇四年に中国系労働者の入国を全面的に禁止する排華法が定められた。(眞嶋亜有『「肌色」の憂鬱 近代日本の人種体験』参考)

二十四 注十二に同じ。

二十五 注十三に同じ。

二十六 西沢『欧州の風俗・社会進化』一八八七年七月、大庭和助

二十七 島田軍吉『通俗演説集』一九〇五年六月、中津柳太郎

二十八 安倍磯雄『婦人の理想』一九一〇年六月、北文館

二十九 元田作之進『善悪長短日本人の心の解剖』一九一六年、広文堂書店

三十 加藤美倫『世界における珍らしい話と面白い噺』一九一八年、誠文堂書店

三十一 田中香涯『優生学と人生』一九二三年、大鏡閣

三十二 夏目漱石『漱石全集』第十四卷 一九九五年八月、岩波書店

三十三 夏目漱石『漱石全集』第十二卷 一九九四年、岩波書店

三十四 前田久徳『谷崎文学の発露——「刺青」の意味と出発期の課題』『谷崎潤一郎物語の生成』二〇〇〇年三月、洋々社

三十五 千葉俊二『谷崎文学を貫くもの——『刺青』から『御菩薩 魍魅子』へ』『別冊国文学』第五十四巻、二〇〇一年十一月

三十六 千葉俊二『大正から昭和への谷崎潤一郎——『青塚氏の話』を中心に——』『日本近代文学』第二十三巻、一九七六年十月

三十七 肌の色に関する描写のない「獨探」の商売女と「本牧夜話」のジャンネット以外の白人女性を対象としている。

三十八 注十一に同じ。

三十九 実際を確認したのは、母或いは母的な存在として描かれていると考えられる人物のうち、肌の色について言及されている「母を恋ふる記」のうら若い女（母）、「吉野葛」の津村の記憶の中の母らしき人、「盲目物語」のお市の方、「蘆刈」（昭和七年十一月〜十二月『改造』のお遊さま、「少将滋幹の母」の母、「夢の浮橋」の母である。

#### 付記

谷崎作品からの引用は、中央公論社愛読愛蔵版『谷崎潤一郎全集』（昭五十六〜昭五十八年）に拠るものである。その他、文献の引用に際し、適宜ルビ等を略し旧字を新字に改めた。なお引用箇所の傍線と／は論者によるものである。／は改行を意味する。

（おおぐろ・はな 平成二十六年卒業生・平成二十八年本学大学院人文社会科学専攻修了生）